

エピローグ

# 「老人ホーム

**熊** 本県南部の山間地、人吉市。老人ホームの園庭に出ると、黒煙を上げて走り過ぎるSL列車が眼下に見える。老人たちは懐かしそうにその光景を眺めながら、談笑に耽<sup>ふけ</sup>っていた。

特別養護老人ホーム「龍生園」。タイムスリップしたようなのどかなたたずまいのこの施設は、業界でもあまり知られていない。

だが、古き良き時代を再現したかのような雰囲気のある老人ホームに、「未来へのヒント」が詰まっている。

「老人ホームが地域を支える」

この施設が掲げるキャッチフレーズだ。「地域が老人を支える」のではない。この逆転の発想が、施設のあり方を大きく変えた。

2年前のことだった。龍生園に近い人吉市の中心、九日町商店街は、日本の多くの地方と同じように、「シャッター通り」と化していた。過疎と高齢化の波にのまれ、地域経済は活力を失ってしまった。

そこで、龍生園は地元と連携したプロジェクトを立ち上げる。その核となるのが、「老人ホーム内商店街」。九日町商店街が、出張商店街という形で年に数回、販売会を行う。玄関ホールにパン

屋、洋服屋、果物屋、靴屋、スポーツ用品店、貴金属店、おもちゃ屋、布団屋、喫茶店が軒を並べ、まるで市場のような賑わいが広がる。

地域最大のイベントと言ってもいい。この日を楽しみにしているのは入所者だけではない。地元商店街が昔の活気を取り戻すかのように軒を並べる。そこに、老人たちの家族が集まってくる。施設職員や地域住民も続々と押しかけ、数百人がごった返す。

そもそも、ホームに入居している老人は、九日町商店街の近くで暮らし、買い物をしていた人が多い。

だが、重度の要介護認定が必要なこの施設に入ると、外界と遮断された生活を送らざるを得なかった。認知症で暴れ出す入居者も多く、窓に鉄格子がはめ

られ、監視カメラやロック付きの重い扉が設けられた介護棟もあった。入所者は、「ここから出せ」と鉄格子にしがみついで、わめき散らした。今でも多くの老人ホームが抱える、「影

の部分だろう。

だが、1つの出来事が、この施設を180度、方向転換させた。

「やることがない」。閉鎖的な施設生活に心が荒んだ男性入居者が、「せめて料理ぐらい手伝いたい」と、地域に



出向いて、料理を習った。かつて一緒に暮らしていた人々との邂逅——。

入居者と住民の交流で、何かが変わり始めた。その効果を知った龍生園は、地域の子供たちと山林を散策する「宝探し」というイベントも始めた。

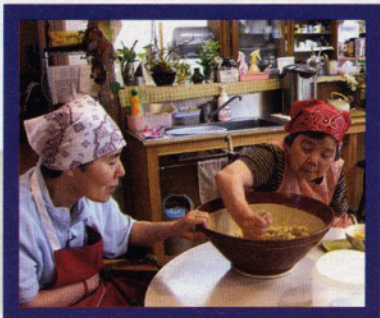


「高齢者と老人ホームという資源を地域社会に生かす。すべての人が関わり合い、楽しみ、双方向以上の効果が得られるようになった」。高村龍子施設長はそう強調する。

## ホーム内の居酒屋で大宴会

6年前、施設のリフォームで、鉄格子も扉も、すべて取り外した。「自由に外と交流する」という方針を、徹底するためだ。

すると、入所者の心理状態が安定し、





# で死にたい」

徘徊する姿が消えた。「北風と太陽」でいう、太陽への発想転換が、功を奏した。

「施設で暮らすのは死んでも嫌だ」と叫んでいた80歳の女性は、

かつて気性が荒く、職員が手を焼いていた。しかし、今では、施設内での「釜煎り茶づくり」に精を出す。「今が人生の中で一番幸せだよ」と女性は笑顔を返した。

自由度を高めて、地域との交流を活発にすれば、老人は蘇る——。そのため、ホーム内には様々な仕掛けがある。

5年前、居酒屋をオープンし、月2回、解放している。地元の名産品は球磨焼酎で、地域住民にとって酒は「日常」だった。

その夜がやってきた。寝たきりに近い要介護4の老人が車いすで訪れ、焼

酎の杯を傾け、ビールを飲み干して歌い出す。「この施設では自室でも自由に酒が飲める。だって病院とは違うんだから」(高村施設長)。

かつて、しいたけを栽培していた男性の要望に応え、裏庭に本格的な「ほだ木」をこしらえた。若い職員が、男性に教わりながら、一緒に栽培に精を出す。中庭の梅の木に実がなると、梅酒も作ってみた。

こうした「自由化」の流れの中で、地元との交流を深め、双方が活性化す



るために、商店街をホーム内に「移設」するイベントが始まったわけだ。閑古鳥が鳴いていた商店街が、老人ホームで息を吹き返した。老人の家族も集ま

るため、世代を超えた賑わいがある。

「いい化粧品はないかね」「動くおもちゃがあるか」。顔見知りが多いから、会話も弾む。そして、つい財布のひもが緩む。

「老人ホームで買い物ができるなんて夢のようだよ」。ある入所者は目を輝かせる。「布団屋さんで数万円の羽毛布団を買った」という職員もいる。

## 「奇跡の回復」と矛盾

今では月1回、入所者がホームを出て、商店街に足を運ぶ。そして、食材を買い込んで、食事を作っている。だから、調理場では、右半身麻痺の女性が左手ですり鉢を押さえて、左半身麻痺の女性が右手でゴマをする。

ホーム生活に潤いが生まれ、思いがけない効果が上がっている。介護度が改善する老人が増えているのだ。要介護3から1に、2段階も改善した例もあった。だが、介護度が改善すると、制度の矛盾が噴出する。施設が受け取る介護報酬が下がり、経営を圧迫する。この施設のように介護度が劇的に改善することを制度が想定していない。

また、「要支援」まで改善すると、制度上、特養の対象から外れてしまう。

「もう家に帰れますよ」。職員がそう声をかけると、老人は驚いて、首を振る。

「嫌じゃ。ここがよか」

仲間や職員と助け合いながら、地

域とも交流して生活を送る…。龍生園は、老人にとって離れられない場所になっている。

そして1年に数十人の入居者が、ここで最期を迎える。

死期が近づくと、部屋には家族や職員だけでなく、入所者仲間や地域の人々がやってきて、ベッドを囲み、別れの時間を過ごす。

いつもは賑やかな施設が、数日の間、静寂に包まれる。

そして旅立ちの瞬間がやってくる。家族が看取ると、1人、また1人と仲間や地域住民が亡骸の周りに集ってくる。数珠をさすり、誰かがつぶやいた。

「私も、ここで死にたい」 ■

